

取組事例

1

場所 ▶ 鹿児島市下荒田

project name ▶ ふぁみりんぐ

#大学生ボランティア

#自習室・学習支援

#季節のお楽しみ会

#レクリエーション

#遊びも勉強も思い切り

第二の実家のような温かさを感じる居場所

「ふぁみりんぐ」

「ふぁみりんぐ」
Instagram



取組内容

コロナ禍における子どもたちの孤立や不安に対するサポートとして、居場所づくりを行っています。

鹿児島市内の大学に通う学生を中心に結成された「ふぁみりんぐ」では、実際の中高生の声を元に、参加者自身の居場所となる空間や第二の実家のような温かさを感じる場所を目指して活動に取り組んでいます。活動の場は、ボランティアと参加者及び参加者同士の積極的な交流の場となっています。また、チラシ配りや各種SNSを使った広報活動にも積極的に取り組みました。特にSNSでは、活動のお知らせに加えて活動報告を行うなど、力を入れました。

今後は、対面での活動の充実を図るとともに、オンラインを活用した新たな活動参加の方法も検討しています。

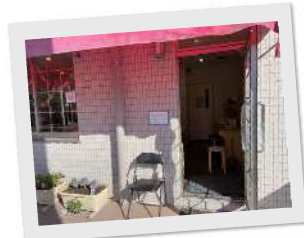
主な活動内容

交流する場や
自習室の開放
(月2回程度)

学習支援
(不定期)

活動内容

カードゲーム クリスマス会
ボードゲーム 習字
ポッチャ キャンドル制作



メンバーの声

様々な人と交流を深める ことができます

学校で何かしらの悩みを持っている人、学習をしたい人、遊びたい人などと一緒に「ふぁみりんぐ」で活動しています。一緒にビンゴ大会やボードゲームをしたり、勉強をしています。

悩みを抱える人を支えられて、 大きなやりがいを感じています

「ふぁみりんぐ」の活動に足を運んでくれる人はもちろん、運営をしている私たちも毎回楽しませてもらっています。参加者の中に、「ふぁみりんぐ」で活動することで学校に行けるようになった人もおり、とてもやりがいを感じています。

工夫点

柔軟に活動内容を決める

利用者の様々なニーズに応えられるよう、活動内容をいくつか用意しています。最初に来てくれた段階で、どういう活動をしたかなどの希望を聞いて、それに合わせて活動内容を変更するなど柔軟に対応しています。

定期ミーティングをする

定期的に運営メンバーでミーティングを行い、活動内容の振り返りや次回開催内容の検討などを話し、全員で意識を高め合いながら活動しています。

感染症対策をする

こまめな換気や物品の拭き取り、検温・消毒などもしっかり行っています。

開催までの スケジュール

10月

ミーティング

顔合わせやどんな居場所にしたいか、今後のスケジュール等について話し合いました。

11月

ミーティング・ 第1回目の開催

SNSとチラシの2つで広報をし、第1回目の開催に向けて準備をはじめました。第1回目では、うまくいかないこともありましたが、参加者が楽しそうに帰っていく姿が印象的でした。

12月

ミーティング・ 第2・3・4回目の開催

居場所の名前を「ふぁみりんぐ」と決め、メンバーも慣れてきた様子。また、何度も参加してくれる子も増えてきました。

1月

意見交換会・ミーティング・ 第5回目の開催

学習支援班と企画実施班に分かれて運営する事となりました。実施回数が増え、メンバーも集まり学生の負担も減り、今後参加する子どもたちが増えることが期待できます。

- #学生団体が運営
- #文化財が居場所
- #和室でゆっくり
- #オンライン開催
- #地域の魅力に
気付いて欲しい

大人から子どもまで気軽に集まる場所 「みんなのおうち鮫島邸」

「みんなのおうち鮫島邸」
インスタグラム



取組内容

文化財を通じて地域の魅力に気づき、自主的に人が集まり、つながりが感じられる「居場所」を運営していきたい。

南さつま市加世田麓にある武家屋敷群の一つで、文化財として国にも登録されている「鮫島博邸宅」を居場所として開放しました。

初回の打ち合わせで、居場所の在り方について考え、地域の小・中学生や自分たちと同じ高校生が居場所にどんなニーズを持っているか話し合って企画を固めました。内容が決まると運営メンバーで役割分担をして、近隣学校へのチラシ配布とSNSで情報発信をしました。

当日は4部屋の和室をフリースペース、作業スペース、談話スペースとして振り分けして、自由にそしてゆっくり過ごせるように装飾。参加者は宿題、談話、お絵かき、外遊びなどをして楽しい時間を過ごしてくれていたようです。

参加してもらったきっかけとして、キャンドルづくり、紙粘土の門松作り、地域の大人と交流する機会を作りました。これにより、運営側と参加者の交流が生まれ、参加者から「楽しかった!」と感想をもらったことが、運営メンバーの励みになったようです。また、運営メンバーの友達や他校の教員と生徒が取組の様子を見に来て、同世代の関心の高さを感じました。



▲ オンライン開催

メンバーの声

「居場所って何?」から始まりました

最初は、歳の離れた子との接し方、一つ一つの声かけなどに悩み、不安も感じていました。しかし、帰る頃になるとみんな笑顔で、中には「また来るね」と言ってくれる子もいました。それがとても嬉しく、自信になり、やりがいを感じました。

これからも私たち高校生や地域の子どもたちの心が少しでも安らぐ場所になれるよう活動していきたいです。

「居場所」になっていることを実感!

運営メンバーと鮫島邸を「居場所」として居心地の良い場にするためにアイデアを出し合っている時から、この取組に携われることにとてもワクワクしていました。

来てくれる人たちに、初めはどのように接したらいいのかわからず「難しいなあ」と感じていました。しかし、同じ空間で一緒に活動していくうちに相手もだんだんと心を開いてくれて、何気ない会話ができるようになったり、毎回楽しみに来てくれる子がいたりしてとても嬉しかったです。

開催までのスケジュール

10月
下旬

運営者ワークショップ

必要なもの、必要なこと、どんな居場所にしたいかを、みんなで話し合いました。

11月

居場所準備

運営の準備をしながら、チラシ作成、SNSのアカウントを立ち上げて広報を開始しました。

12月

居場所運営

参加者が集まりやすい、第2土曜日と冬休みに開催しました。

1月

居場所運営

感染者が増えて来たため、対面式からオンラインの開催に変更しました。

工夫点

居場所に立ち寄りやすいように、小さなイベントを企画

持ち物にネームタグをつけて忘れ物がないように工夫

改善点

コロナ禍の影響を受けている人が来るように、各学校や保健師や児童福祉に関わる機関と連携する

- #学生団体が運営
- #地域活性の取り組み
- #公民館でわいわい
- #SNSで盛り上げ
- #同世代に楽しんで欲しい

「地域を盛り上げたい!」という想いで運営 「いずみ学生つむぎ隊」

「いずみ学生つむぎ隊」
Instagram



取組内容

「自分たちの好き・得意・できるを活かし、したいことができる場所」をつくる。

北薩地区では、出水市の「地域を盛り上げたい」という想いで結成した「いずみ学生つむぎ隊」が居場所の運営を行いました。ターゲットを主に中高生とし、気軽に多くの学生が立ち寄れるように、中学校・高校が多いエリアの公民館で実施しました。同世代である中高生がコロナ禍による環境の変化で悩みを抱え孤立していることに目を向け、次の2点に着目して居場所運営に取り組みました。

「悩みを持っている人たちが楽しめるようにするには何が必要か」「そもそもコロナ禍の居場所とは何か」 私たちが出した答えは「自分たちの好き・得意・できるを活かし、

参加者がしたいことができる場所」をつくることでした。

第1回ではクリスマスが近いということもあり、スイーツ作りを行いました。またメイクが得意なつむぎ隊のメンバーにメイクをしてもらうことのできる場も作りました。

第2回・第3回では、冬休みの宿題や受験勉強の教材を持ち寄り、勉強を教えあう様子が見られました。息抜きにバドミントンや、雑誌や本、フリーWi-Fiも用意しました。また、フードバンクからお菓子や飲み物を提供してもらい、みんなで食べました。

広報はつむぎ隊のSNSアカウントで情報を発信。活動報告はもちろん、居場所運営の1週間前からカウントダウンで開催案内の投稿をしました。

運営メンバーは、回数を重ね、積極的に友人を誘ったことで、居場所の意義を再認識し、より主体的な活動になったように思います。

メンバーの声

落ち着ける場所を提供したい

私は今回の取り組みで、コロナ禍で居場所がなくなっている中高生に少しでも落ち着ける場所を提供したいと思いました。回を重ねるに連れ、参加者が増え、嬉しかったです。今後、実施する時はもっと多くの人に来てくれるような場所にしていきたいです。

楽しむ様子がとても嬉しかった

初めは「人が来るかな…」という不安がありました。2回目、3回目と続けていくうちに来てくれる人が増えていきました。これから、この場所が気軽に立ち寄れる場所となれるようには何が必要かメンバーで考えていきたいと思いました。

工夫点

冬の寒い中での開催だったので、来た人が暖を取れるようにしました。

退屈しないように、いろんなグッズを準備しました。

改善点 知り合い以外の参加が少なかったため、広報を工夫して、多様な人に来てもらいたい。



開催までのスケジュール

11月

オンラインでミーティング

平日の夜などに、オンラインでミーティングを開催して、開催場所や実施内容を決めました。

11月中旬

場所の決定と予約・広報

中学校・高校から近い公民館を借りて、団体のSNSで広報を始めました。

12月

居場所運営

日曜日に、勉強会とクリスマス催しを合わせて開催。「Make a Boyfriend大作戦」というテーマで、お菓子づくりなどをしました。

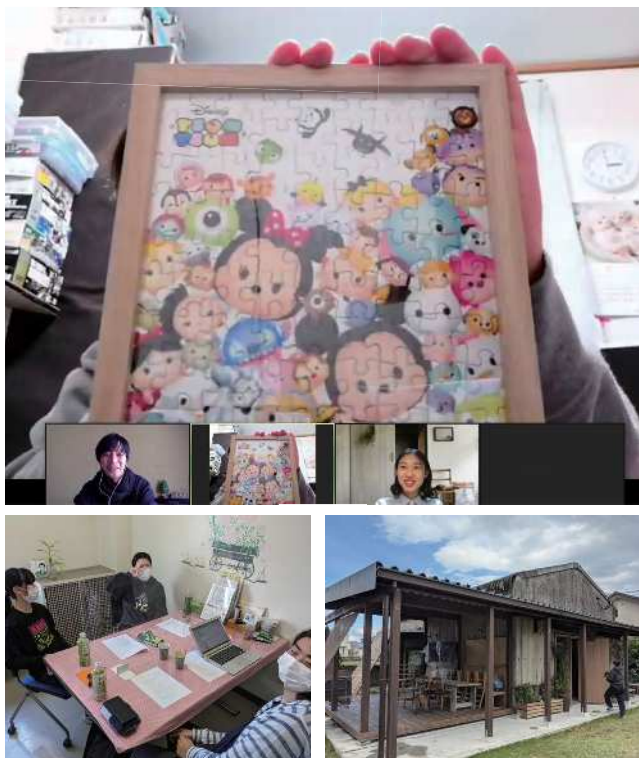
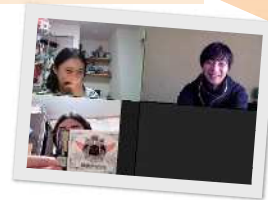
1月

3回の運営を予定

新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止。

- #通信制高校
- #オンライン開催初心者
- #大人と交流
- #中学生・高校生向け
- #人見知りの参加也大歓迎

誰でもゆっくり過ごせる10代によるオンラインの居場所 「プナヘレ」



▲会場での打ち合わせ

取組内容

オンラインで顔を見たり、話すだけで居場所になる。

大隅地域では、通信制高校に通う生徒を中心に居場所の運営を行いました。対象者は主に、運営メンバーと同じく通信制高校へ通う生徒と、学校に行けていない中学生を想定しました。時期がテスト期間と重なったので勉強ができる場所として運営し、中学生が来れば通信制高校について知ってもらうための交流もできるように準備しました。

しかし、コロナ感染者が増えたので、予定していた居場所をオンラインでの交流に切り替えました。運営メンバーで事前にオンライン会議を

して、オンラインツールの機能・使い方の確認や当日の段取りを話し合いました。取り組みとして、心理テスト、手相占い、画像共有とそのエピソードトーク、運営メンバーの一人は準備していたパズルを時間内に完成させる計画を立てました。

当日の参加者は少なかったのですが、関係する大人も参加し、準備したことをやってみて、オンラインで盛り上げることを模索しました。計画の他には、それぞれ参加している場所を紹介することや、大人が生き立ちについて話をし将来についての意見交換をしました。普段接することが少ない人と時間をかけて交流できることは、オンラインならではの取組だと感じました。

メンバーの声

オンラインが新鮮でした

私はオンラインで何かをすることは初めてでした。最初は使い方も分からず、戸惑いましたが、2回目にはできるようになりました。友達とは学校の連絡をする程度なので、オンラインで顔を合わせることは新鮮でした。

初めてのオンラインで緊張しました

友人と顔を見てオンライン通話はしますが、オンラインツールを使うのは初めてでした。初めての人と話すことに抵抗がありました。話してみるとスムーズに交流できました。積極的に参加をすることは難しいですが、オンラインの居場所が増えると良いなと思いました。

オンライン開催のコツ

画面越しだと、いつもより話すことができた。カメラをオフにすると、知らない人とも積極的に交流できそう。

皆でオンラインの勉強会をすると、時々話せることで気分転換ができて、勉強が捗りそう。

初めての人は、聴くだけ参加もOKにして、参加のハードルを低くする。



▲紹介チラシ

開催までのスケジュール

- 11月 打ち合わせ・会場決定

居場所のイメージが湧かなかったけど、開催場所が決まってからはスムーズに進みました。
- 12月 チラシ作成・会場との打ち合わせ

会場の雰囲気から「プナヘレ(私のお気に入り)」というコンセプトにしました。
- 1月 チラシ配布・買い物・直前準備・居場所運営予定

母校に行き、チラシ配布のお願いをしました。しかし、感染拡大防止のため運営中止…。
- 2月 オンラインの居場所開催

関係者や知り合いに呼びかけ、オンラインで開催。

他県の取組について

子どもを対象にした居場所づくりの取組は全国でも広がっています。運営の参考に、静岡県・長野県の活動を紹介します。



1

静岡事例

ibasyo

居場所

高校内に
OPEN

カフェ
cafe



特定非営利活動法人
しずおか共育ネット
井上 美千子 代表理事



団体
ホームページ



私たちの法人は「すべての中高生が自らのポテンシャルに気づき、個性と能力を発揮できる社会の実現」をビジョンに掲げて、学校の外から生徒たちの学びや成長をサポートする取組をしています。

2017年からは静岡県立静岡中央高校(定時制・通信制)にて、居場所の一環として生徒が集まれる「きやりこみゆカフェ」を運営しています。このカフェは飲み物やお菓子を無償提供していて、誰でもふらっと立ち寄ることができます。会場ではオセロや将棋などのボードゲームがあったり、ボランティアスタッフの大学生や市民がハンドマッサージやギターの演奏など特技を活かした取組をしています。人と交流するのが苦手な生徒や一人で過ごしたい生徒には「秘密基地」と称した、狭めの個室も準備しています。

活動を始めたきっかけは、高校生は就業や将来に対する不安が大きく、多様な人とのつながりや社会的経験を積むことで生きていく力を育んで欲しいと思ったからです。

居場所では生徒とボランティアが交流する仕掛けを、いろいろ考えます。季節の催しとしてクリスマスパーティを開催したり、名物の「静岡おでん」を振る舞うこともありました。

顔を合わす回数が増えると、自然と交流が生まれ、生徒とボランティアの関係が築かれます。すると悩みや相談がぼろっと出てきて、話を聞くことで気持ちがスッキリすることがあります。スッキリするのは、先生でも親でもない「斜めの関係の力」だと私は思っています。

活動を続ける中で、私たちが新型コロナウ

イルスの影響を受けました。校内での開催が校外に変わり、それも難しくなって現在は食べ物の配布をメインで行っています(令和4年1月現在)。この期間、家電や就職用のリクルートスーツがないなどの困りごとにも対応をし、子どもたちもコロナ禍の影響を受けていることを感じています。

居場所を通じて、安心して顔を合わせる事ができ、一人ひとりに必要な取組が届けられるように、状況に応じた活動を続けていきたいと思っています。

鹿児島県と交流

2つの団体と鹿児島県の運営メンバーが、居場所づくりの意見交換会をオンラインで開催しました。2団体の取組に加え、県内の取組も紹介し、工夫や困りごとを共有しながら、他地域のメンバーと交

流しました。会の終盤では、学生メンバーから「いろんな側面から居場所づくりができることに気付いた」「2つの団体の取組の必要性を感じた」「学生が自主的に活動するきっかけがあり、大人は活動する環境を整えることをしてほしい」などの、感想が出てきました。



2

長野事例

フォーース

Fourth

Place

プレイス

高校生の思いからスタートした居場所



特定非営利活動法人
長野県 NPO センター
小林 達矢 事務局次長



Fourth
Place
ホームページ



私たちは、県内の市民活動が場所や分野を超えて幅広く活動するための地域や仕組みづくりをしています。その活動の一環で、主に通信制高校生や全日制高校生・大学生が集える居場所「学びの拠点 Fourth Place」を運営しています。

ここは、日中や放課後に勉強をしたり、自由に過ごしながら、人とのつながりを育むことのできる居場所です。「誰かと話したい」「家と学校以外で居場所や友達が欲しい」と考えている人を中心に、無料で誰でも参加できます。社会との接点から、思ってもいないことに出会い、やりたいことを発見し、社会の中で自分の居場所や可能性に気付いて欲しいと考えています。

場所は長野市中心部のビル内にあり、自習・ミーティングルーム、フリースペース、そして卓

球場を備えています。室内ではインターネットを無料で使用することができ、タブレットの貸し出しも行っています。交流のきっかけとなる楽器や各種ゲーム、高校生の地域活動をサポートするホワイトボードやプリンターなどの備品を備えていることも特徴です。

開催は週に3日、主に午後からOPENしています。週に1回は相談日を設定し、月に1度は高校生が主体となった催しを行ないます。参加者の様子やニーズに合わせて取組を柔軟に変更しています。

居場所の発端は、高校生がアクションプランを企画実践していく取組で、「高校生が地域活動をする時の活動拠点が欲しい」と提案されたことがきっかけです。高校生が潜在的にもっている「何かしたい」という意識と、令和元年の豪雨災害が重なり、活動拠点が必要だ

とが分かり開所しました。以降新型コロナウイルスの感染が深刻化し、通信制高校の子ども達の日中の居場所が必要となり、もっといろいろな方に来てもらえるようにと、現在の運営方法になりました。

運営をしていると、通信制高校に通う生徒が中心となったプロジェクトが始まりました。コミュニケーションに自信を持っていなくても、自分の力を活かしたいと思う人がプロジェクトに参加して、同じ空間を共有することがねらいです。大人の話の聞いたり、工作やスポーツ、演劇などのワークショップを続けていき、自分の良さに気付いて個性が輝けるようになって欲しいと思っています。

私も高校生時代、家と学校の行き帰りだけで孤独を感じたことがあります。そんな時にふらっと寄れる拠点を今後も目指していきます。